
戯言語 渡り鳥の怪

零崎零王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戯言語 渡り鳥の怪

【Nコード】

N0260W

【作者名】

零崎零王

【あらすじ】

その日俺は一匹の鳥に会った。気づいたら化物語の世界で阿良々木朧としての人生を送っていた。この世界で生きていくしかねーか

※この小説には独自解釈があります。

第1怪 ひたぎクラブ其ノ壱（前書き）

前から言っていた化物語とめだかボックスのクロスオーバーできました。

化物語編からスタートです。
それではどうぞ

第1怪 ひたぎクラブ其ノ壱

001

みなさん始めまして阿良々木あらぎぎ木き臈ろうだ。

さてと、今から阿良々木あらぎぎ木き曆れきの物語について語る訳だが、俺自身も怪異に出会っている。まあこの話は機会があれば話すことにしよう。
あくまでこの物語は、阿良々木あらぎぎ木き曆れきが主人公だ。

青春におかし

な事は憑き物だ

002

悪夢のような春休みが終わり、三年になったこの日僕はまた怪異に
出会う事になる。

避けるより正しい判断…だったろう。いや、間違っていたのかもしれない。

なぜなら、彼女の体がとても、とてつもなく軽かったから。そう、

彼女には、

戦場せんじょうヶ原がはらひたぎにはおよそ体重と呼べる物が全くと言っていいほど
無かったのである

「文化祭といっても、私達もう三年生だからね。さしてする事もな

いんだけど、受験勉強のほうが大事だし、予め私達で候補を絞っておいて、その中からみんなの投票で決定するって事でいいかな？」

「いいんじゃないのか？一見民主主義ぽくて」

「相変わらず嫌な言い方するよね阿良々木君は、ひねてるって言うか……」

はねかわつばさ

羽川翼クラスの委員長。規律正しく、折り目正しく、恐ろしく真面目で教師受けも良いと聞く。

委員長の中の委員長である。

「参考までに阿良々木君は去年、一昨年、文化祭の出し物何だった？」

「お化け屋敷と喫茶店」

そして副委員長である僕は、現在文化祭の計画を羽川と二人で練っているという訳だった。

「なあうちのクラスに戦場ヶ原っているだろ？」

「戦場ヶ原さん？戦場ヶ原さんがどうかしたの？」

「まあなんか気になって、あいつ病弱だからってよく学校休むだろ？文化祭には参加するのかなーって、いや、それにほらなんか戦場ヶ原ひたぎなんて変わった名前で面白いじゃん」

「戦場ヶ原って地名性だよ？」

「あーえっとそうじゃなくて、僕が言ってるのは下の名前の方だから」

「戦場ヶ原さんの下の名前ってひたぎでしょ？そんな変わってるかな？ひたぎって確か土木関係の用語じゃなかったっけ？」

「お前は何でも知ってるな」

「なんでもは知らないわよ、知ってる事だけ」

「珍しいね」

「えっ」

「阿良々木君が他人に興味をもつなんて」

「いやそんなじゃないけど」

「病弱な女の子男子は好きだもんね。あーヤダヤダ汚らわしい汚らわしい」

「病弱ね。……」

いや、しかしあれは病気なのだろうか？

「とにかくさ、戦場ヶ原ってどんな奴なんだ？」

「戦場ヶ原さんの事なら阿良々木君の方が良く知ってるんじゃないのかな？三年連続同じクラス

だったんでしょ？」

「そう言われれば確かにそうなんだが」

「うーんまあ何の問題もない優等生だよ。成績だって良いしね」
「だろうな」

「でも同じクラスになってまだちょうど一ヶ月だしね。分かんない
つてのがやっぱりかな？ゴールデン
ウィークはさんじゃってるしね」

「ゴールデンウィークね」

「うん？ゴールデンウィークがどうかした？」

「どうもしない。続けて」

「そうだねえ：戦場ヶ原さん言葉数も多いはずじゃないし、友達も
全然いないみたい。やっぱり、病気のせいなのかな？中学生の時は、
もっと元気いっぱいいて明るい子だったんだけどね」

「中学生の時って羽川、戦場ヶ原と同じだったのか？」

「うん。戦場ヶ原さん凄く綺麗だったし、運動もできたから、陸上

部のスターだったんだよ。だから話だけなら色々聞いたもんだったよ」

「話って？」

「すごく人当たりの良い人だって話。なんかお父さんが、外資系企業のおえらいらしくて、お家もすごい豪邸で、それでも全然気取った所がないんだって話」

「超人みたいな話だな」

「でもこんな事言っちゃいけないんだろうけど、戦場ヶ原さん…」
「何？」

「今の方が昔よりずっと綺麗なんだよね。存在がとても儚げで」

存在が儚げ……

「あーそうだ思い出した。僕忍野に呼ばれてるんだった」

「忍野さんに？何で？」

「ちよつとまあ仕事の手伝いを」

「ふーん」

「羽川後任せていいか？」

「埋め合わせすると約束できるなら今日はいいわ。忍野さんを待たせても悪いしね」

「悪いな」

「忍野さんによろしくね」

「羽川さんと何を話していたのかしら」

「うん？」

「動かないで」

把握した

「ああ違うわ。動いてもいいけれど、とても危険よと言うのが正しかったわね。好奇心というのは、まったく

ゴキブリみたいね。人の触れられたくない秘密ばかりに挙って寄ってくる。鬱陶しくて堪らないわ」

「おい」

「何よ右側が寂しいの？ だったらそう言ってくれればいいのに、まったく私も迂闊だったわ。まさかあんな所にバナナの皮が落ちているなんて思いもしなかったわ」

「気づいているんでしょう？ そう私には、重さがない。といってもまったく無いという訳でもないのよ私の身長、体格だと平均体重は40kg後半というところらしいのだけれど、実際の体重は5kg」
「えっ」

「中学校を卒業してこの高校に入る前のことよ。一匹の蟹に出会って重さも根こそぎ持っていかれたわ」

「……」

「別に理解しなくてもいいのよ。これ以上嗅ぎまわられたら凄く迷惑だから、喋っただけだから。」

阿良々木君 阿良々木君 ねえ 阿良々木君」

戦場ヶ原は、僕の名前を繰り返して呼んだ。

「さて、阿良々木君私はあなたに私の秘密を黙っていてももらうために、何をすればいいのかしら？」

私は私のために何をすべきかしら？ 口が裂けても喋らないと阿良々木君に誓ってもらうには、どうやって口を封じればいいかしら？」

「とにかく私が欲しいのは、沈黙と無関心だけ。沈黙と無関心を約束してくれるなら、二回頷いてちょうだい。阿良々木君それ以外の動作は停止であれ敵対行為とみなして即座に攻撃にうつるわ。」

コクコク

「そうありがとう」

そういうと彼女戦場ヶ原は、僕の中にあるホッチキスを躊躇うことなく

ガチャ

「ウグッ」

「悲鳴をあげないのね。立派だわ。今回はこれで勘弁してあげる」
「お前」

「それじゃ阿良々木君明日からは私の事ちゃんと無視してね。よろしくさん」

悪魔みたいな女だ。でもこの程度なら僕は大丈夫

「あれ？阿良々木君？」

「羽川」

「まだいたの？忍野さんの所早く行かなくていいの？」

「羽川お前バナナ好きか？」

「まあ別に嫌いじゃないけれど栄養価高いし好きか嫌いかで言うとうん好きだよ」

「どんなに好きでも校内では絶対に食べるなよ」

「は？はあ？」

「食べるだけならまだいい残った皮を階段にポイ捨てしてみろ僕はお前を絶対に許さない」

「一体何を言ってるの阿良々木君？」

「飽きたわいえ、ここは素直に驚いたというべきね。あれだけの事をされておいて、すぐに反抗精神を立ち上げる事ができるなんて」

「戦場ヶ原」

「いいわ分かった、分かりました、阿良々木君戦争をしましょう」

「ちがうちがう戦争はしない」

っていうかその大量の文房具はどこから出した!?

「しないの? なぁーんだ?じゃ何の用よ」

「ひょっとしたらなんだけど、お前の力になれるかもしれない思
って」

「力に? ふざけないであなたに何ができるっていうの? 黙って気を
払わなければそれでいいの。優しさも敵対行為とみなすわよ」

「戦場ヶ原」

「何よ?」

僕は、戦場ヶ原にさっきまで傷のあった所を見せた

バラバラバラ

「傷が無い? あなたそれってどういう?」



「忍野、忍野さん」

「そう、忍野メメ、忍野のおかげで僕は吸血鬼から人間に戻れたんだ不死身だった頃の後遺症が少し残っているけど」

「ふーん忍野メメね。なんだかさぞかし萌えそうな名前じゃないの」
「期待するだけ無駄だぞ。30過ぎの中年だからな」

「あつそうでも子供の頃はさぞかし萌えキャラだったのでしょうね」

「そういう目で生身の人物を見るなっていうかお前萌えとかキャラとか分かる奴なのか？」

「此れしき一般教養の部類よ。私みたいなのをツンデレって言うでしょう？」

お前みたいなのはツンドラって感じた。

「着いたぞ」

「お尻が痛いわ。ジンジンする。スカートにしわが寄っちゃったし」

「僕の責任じゃない」

「言い逃れは止めなさい。切り落とすわよ」

「どの部位をですか？」

「そういえばお前自分の鞄はどうしたんだ？手ぶらだけど？」

「教科書は学校のロッカーに置きっぱなし。それに体中に文房具を仕込んでおけば、鞄は不要よ」

「あーなるほど」

「両手が自由になっていないといざって時に戦いにくいもの」

「その文房具とやら預かる」

「えっ」

「預かるから出せ」

「あっえっ？」

「忍野はなんていうか変なおっさんだけど、一応僕の恩人なんだ。その恩人に危険人物を会わせる訳にはいかなから文房具は僕が預かる」

「此処に来てそんな事を言うなんてあなた、私を嵌めたわね」

「……………」

「……………」

「了承したわ受け取りなさい」

「お前なあ」

「勘違いしないでね別に私はあなたに気を許した訳ではないのよ」

「気を許した訳ではないって…」

「いいこと？ 私から一分おきに連絡が無かった場合、五千人のむくつき仲間が、あなたの家族を襲撃することになっているわ」

「余計な心配するな」

「一分あれば事が足りるというの！？」

「僕はどこかのボクサーだよ」

「妹さんまだ二人とも中学生なんですってね」

家族構成を把握されている！？

「コッチだ」

「何よ感謝されるなんて思わないでよ」

「分かってるよ」

「むしろあなたが感謝しなさい」

「分からねーぞ」

「あのホッチキス傷が目立たないようにと思って、わざと外側じゃなくて、内側に針が刺さるようにしてあげたのよ」

「それは顔は目立つから腹を殴れみたいな、加害者側の都合だろ？」

「まあどのみち全然無用な気遣いだっただけだ」

「不死身って便利そうねって言われたら傷つく？」

「今はそうでもない」

「あら、そう」

「それにもう不死身じゃない」

「傷の治りがちつとばかり早いってだけで、ほかは普通の人間だ」

「阿良々木君最後に言っておくけれど」

「何だよ？」

「服の上からだとはそうは見えないけれど、私の肉体は法を犯してまで、手に入れる価値は、無いかもしれないわよ？」

「なんかお前全般的に見て自意識過剰っーか、ちよつと被害妄想強すぎるんじゃないか？」

「嫌だわ、本当の事でも言っただけで良い事と悪い事があるでしょう？」

「自覚している？」

「それにしても、よく今にも壊れそうなビルに住んでいるわね。その忍野って人」

「ああ随分な変わり者だね。でも僕や戦場ヶ原みたいなを専門にしているんだって」

「おー阿良々木君やっと来たのかい、なんだい阿良々木君今日はまた違う女の子を連れてくるんだね」

「やめろそんな人を安いキャラ設定にするな」

「そうそう君が来るから一応朧君にも来てもらってるよ」

「兄さんが？」

「そうだよ」

「阿良々木君あなた兄がいるの？」

「あーうんまあ」

「うーんはじめましてお嬢さん、忍野です」

「はじめまして戦場ヶ原ひたぎです。阿良々木君とはクラスメイトで忍野さんの話を教えてもらいました」

「あーそう」

「忍野こいつが二年くらい前に」

「こいつ呼ばわりは止めて」

「じゃなんて呼べばいいんだよ？」

「戦場ヶ原様」

「センジョウガハラサマ」

「片仮名発音はいただけないわちゃんと言いなさい」

「戦場ヶ原ちゃん」

ドスッ

「痛ってー失明するだろうが」

「失言するからよ」

「何だその等価交換は」

「銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、照れ隠し五グラムに悪意九十七キロで、私の暴言は錬成されているわ」

「ほとんど悪意じゃねえかよ！」

「ちなみに照れ隠しというのは嘘よ」

「一番抜けちゃいけない要素が抜けちゃった！」

「うるさいわねえ。いい加減にしないとあなたのニックネームを生理痛にするわよ」

「投身モンのイジメだ！」

「何よ文字通り生理想象なのだから、恥ずかしいことではないわ」

「悪意がある場合は別だろう！」

「それよりなによりもまず、あの子は一体何？」

「ああ、あれは気にしなくても良いよ。影も形も無い、名前もなければ、存在も無いそういう子供」

「いやいや阿良々木君。名前は昨日付けてやったんだ。ゴールドンウィークには働いてくれたしね」

「へえー名前をねなんて名前？」

「忍野忍と懷けてみた。刃の下に心あり彼女なりのいい名前だろう？苗字はそのまま僕のを流用させて貰った」

「良いんじゃないのか？」

「だからあの子は一体何なのよ？」

「だから何でもないんってば」

吸血鬼の成れの果て、美しき鬼の搾りかす、なんて言ってもそんなの仕方が無いだろ

「何でもないなんて酷い言い方をするなよ。忍野忍っていう名前があるって今話したはずだろ」

「兄さん？」

「おいおい臃で良いっていつも言ってるだろ？」

「阿良々木君この人は？」

「あーえっとこの人は阿良々木臃僕の兄さんだ」

「似てないわね」

「よく言われるよ」

「あれ？今日はまた違う女の子を連れて来たんだな」

「忍野みたいな事を言わないでください」

「ごめんごめんえっと、はじめましてお嬢さん阿良々木臃です。阿良々木暦の兄です。義理のだけど」

「はじめまして戦場ヶ原ひたぎです。阿良々木君とはクラスメイト

で忍野さんの話を教えてもらいました」

「あーそう」

「あーそうだ此処に来るまでにバナナ買ったんだけど食べる？」

「結構です」

「暦お前は？」

「あー僕も要らないよ」

「そう？美味しいのに」

「隼君話を戻してもいいかな」

「あー悪い悪い黙ってるから続けて」

「私を助けて下さるって聞いたのですけれど？」

「助ける？そりゃ無理だ。君が勝手に一人で助かるだけだよ。お嬢ちゃん」

「私に向かって同じような台詞を吐いた人が五人いるわ。その全員が詐欺師だった。あなたもその部類なのかしら？忍野さん？」

「随分と元気いいね何かいいことでもあったのかい？」

「まあ何にせよ話してくれないと話には先に進まないかな？秘密は厳守するから平気平気」

「このおっさん怪異の専門家だけどそれ以外はただのおっさんだから話す相手もいないと思うから」

「隼君容赦ないねー」

「別にいいだろ呼び出されて来てみればまだ話すらしてないんだぜ？」

「ああ僕が簡単に説明すると……」

「いいわ阿良々木君自分でするから」

「戦場ヶ原」

「自分でできるから」



004

「重し蟹？」

「うん九州の山間辺りでの民間伝承だよ。地域によって重し蟹だったり、重いし蟹、重いし神、蟹と神がかっててる訳だ」

「でも九州って？どうしてそんな所の？」

「場所そのものに意味がある訳じゃないからね。そういう状況があればそこに生じるそれだけ」

「ふーん」

「この場合別に蟹じゃなくてもいい。兎だって話もあるしそれに、忍ちゃんじゃないけれど美しい女の人

だって話もある」

「ふーん月の模様みたいだな」

「まあお嬢ちゃんが行き会ったのが蟹だって言うんなら、今回は蟹なんだろう」

「何なんですか？それは？名前なんてそんなのは何だって構いませんけれど」

「名前は重要だよ。さっきも言ったけど、蟹じゃなくて本は神なの

かもしれない重いし神から重し蟹に派生したって事だね。まあお嬢ちゃんは運の悪い中じゃ運の良い部類だよ」

「どうしてですか？」

「神様なんて何処にでもいるからさ。何処にもいるし何処にも居ない。お嬢ちゃんがそうなる前からお嬢ちゃんの周りにはあったし、あるいは無かったとも言える」

「はあ禅問答ですねまるで」

「神道だよ。あつ、修験道かな？」

「勘違いするなよお嬢ちゃん君は何かのせいでそうなった訳じゃない。ちよつと視点が変わったただけだ」

「視点が？何が言いたいんですか？」

「被害者面が気に入くわねえってんだよ。お嬢ちゃん」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「へえなかなかどうして、てっきりワガママなお嬢ちゃんかと思っただけど」

「どうしてそう思っただんですか？」

「重し蟹に出会うような人間は大抵そうだからだよ。会おうと思つて会えるようなものじゃないし通常触るような神でもない」

「触らない」

「ただそこにいるだけで、お嬢ちゃん何か望まない限り実現しないんだ。いや、もっともそこまで事情に深入りするつもりはないけれど、とにかく良いよ分かった体重を取り戻したいというなら力になるさ」

「阿良々木君の紹介だしね」

「助けてくれるんですか？」



第1怪 ひたぎクラブ其ノ壱（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

アイディアはあっても時間がないんです（苦笑）

チート小説が書きたくなったので、もしできたらまたお知らせします。

フェアリーテイルの予定です。

感想を戴けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0260w/>

戯言語 渡り鳥の怪

2011年10月9日10時30分発行